

—研究資源アーカイブ映像ステーションイベント—

第二回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録

<山本天文台特集>



2011年7月28日 京都大学映像ステーション

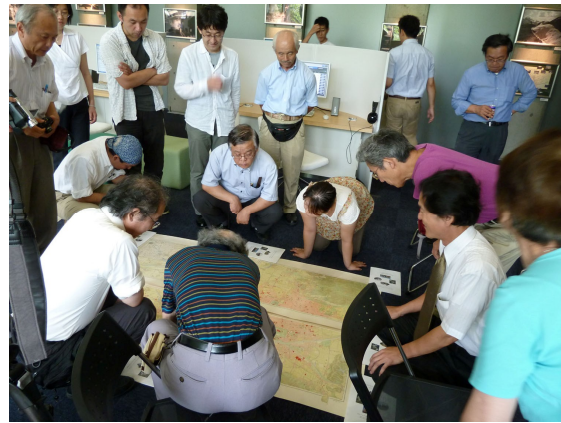
京都大学総合博物館・研究資源アーカイブ＋理学研究科附属天文台＋
理学研究科宇宙物理学教室 共同プロジェクト

人

大坂の医者寺島良安は師の教え「医を業としようとするならば、上は天文を知り、下は地理を知り、中は人事を知らねばならない」により、明の王圻が著した図絵入り百科全書『三才図会』百六巻にならって『和漢三才図会』百五巻を正徳二年（1712）出版した。ディドロの『百科全書』（1751-1757）と対比される比較文化史的価値の高い当時のベストセラーである。『和漢三才図会』の天部をもじった劇作『和談三細図会 天部初編』が天保十三年（1842）に錦葉老人により出版されている。このパロディー本は山本先生が愛された曆書・和算の書棚にあり、江戸時代の文人の遊び心に共感しておられたことを感じる。三才は天地人也。天は山本天文台の回転ドーム、地は地球儀と望遠鏡模型群、人は京大天文台アーカイブプロジェクト。



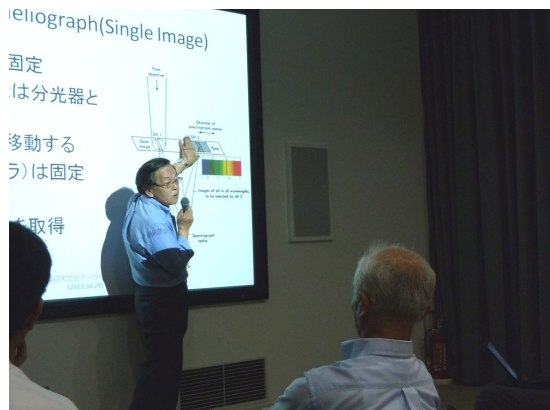
資料寄贈者山本章氏（中央）、坂井義人氏紹介（右）



昭和3年発行一万分の一京都市地図を見る



文化期の大星図を見る



ヘリオグラフ乾板を用いた研究について
講演する北井氏



山本一清先生の秘話を紹介する坂井氏



挨拶する山本氏

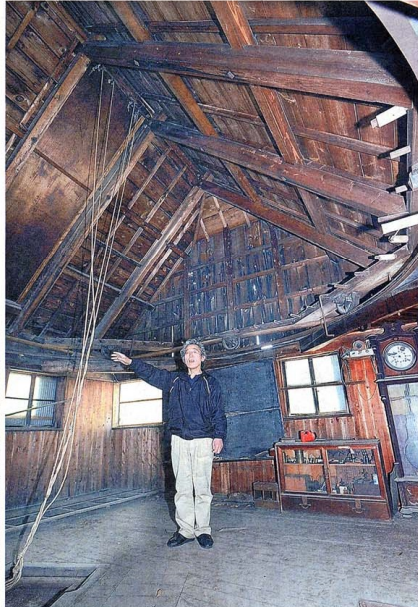
映像ステーションにおける報告会のようす

日本の天文学育てた 山本天文台

黎明期示す資料に光

「アマチュア天文学の聖地」とされる大津市桐生の私設天文台「山本天文台」。老朽化により10年前から閉鎖されている同天文台には、日本のアマチュア天文学の黎明期を示す資料が多数残されている。6月初旬に京都大、資料が寄贈されるにあたり、富田良雄助教らのグループがこのほど現地調査を行った。

京大助教ら調査



第二観測所の3階部分、山本一清の孫、寛さんは「レールを使って屋根を回転させていたのを覚えていました」と話す。撮影：木原良男

山本天文台は、京都大花山天文台の初代台長、山本一清（1889～1959年）が1942年に自宅内に開設した。全国から若いアマチュア天文学者が訪れ、観測のしなから観測、火星観測の第一人者、佐伯恒夫氏、海老沢嗣郎氏ら世界トップクラスで活躍する天文家を育てた。今回の調査は資料を大学へ運び入れるための事前調査で、京大の天文台、研究資源

アーカイブ、宇宙物理学教室と、山本が創設した国内最古の天文同好会東亜天文学会が四者合同で行った。観測の拠点となった第一観測室の屋根下には、天窓付きの屋根を360度回転させるレール（長さ4・8m）が張り巡らされ、全方位を観測できる仕組みになっていた。床の一部には赤道儀の軌道を通すための隙が開けられ、約7m下の地下室まで直通していた。富田助教は「京

資料も豊富に見つかった。第一観測室千障には、20～37年に大砲の活動現象を撮影した写真乾板2千枚以上が保存されていた。富田助教は「京



研究室の本棚には国内外の文献がザル分けして収められていた。興味の対象の幅が広がる。

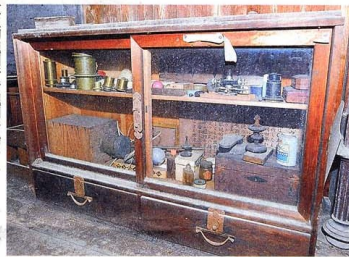
大正一昭和初期 太陽の写真乾板2000点超も



暗室も備えられ、撮影した写真はそのまま現像されていた

大正前期観測所で観測を始めた以前の記録で、初めての発見、太陽活動のハロメーターを知ることのできる貴重な資料と評価する。

観測室に隣接する研究室には、国内外の研究者との交流で集められた数千点もの文庫があり「木星」「オーロラ」「伊能忠敬」などジャンル別に整理されていた。同アーカイブのデジタルコレクションアーキビスト五島敏芳さんは「資料整理に数年かかるが、将来的には公開したい」としている。（行司千絵）



観測用のカメラと望遠鏡の接眼レンズ。第二観測所の3階の戸棚に残されていた

報告会プログラム

<山本天文台資料保管室見学会>

7月28日11時より 京都大学北部総合教育研究棟（益川記念館）205号室

<報告会>

7月28日13時半より 京都大学映像ステーションにて

あいさつ 柴田一成

寄贈者紹介 山本章氏、坂井義人氏

参加者紹介

経過報告 富田良雄

今後の調査研究課題

山本博士資料の特徴について 五島敏芳

乾板類 ヘリオグラフ乾板 北井礼三郎

直接乾板、対物プリズム乾板 前原裕之

カルバー46cm 反射望遠鏡 坂井義人

観測用器具類

気象観測機器 武田榮夫

本・雑誌・資料

東亜天文学会資料 大西道一

その他 国友関係など

調査研究の体制

カルバー鏡の動態保存、山本博士書齋復元

参加者（敬称略）

山本天文台：山本章 小川村：坂井義人

総合博物館：五島敏芳、角井宏司、池田素子、山下俊介

花山天文台：柴田一成、北井礼三郎、野上大作、前原裕之

宇宙物理学教室：富田良雄 国立天文台：中桐正夫、田島俊之

同志社大学：宮島一彦 京都学園大学：岩崎恭輔

防災科学技術研究所：根岸弘明、井口隆、堀田弥生、鈴木比奈子

東亜天文学会：大西道一、武田榮夫、佐竹真彰、豆田勝彦

月光天文台地学資料館：五味政美

久保田諄（見学会のみ）

山本一清先生の略歴

- 1889年5月27日 滋賀県栗太郡上田上村大字桐生 289 番地で生れる。
- 1907年3月 滋賀県立膳所中学校卒業、同9月第三高等学校第二部工科入学。
- 1908年6月23日 京都市の平安教会で故西尾幸太郎牧師から洗礼をうける。
- 1910年7月 第三高等学校卒業。9月京都帝国大学理工科大学物理学科入学。
- 1913年7月13日 京都帝国大学卒業、同大学院入学。同12月14日結婚。
- 1914年1月 臨時緯度観測所嘱託、同5月水沢行。1916年5月京大に帰る。
- 1914年4月24日 京都帝国大学理工科大学助手。翌年4月24日京大理科大学講師。
- 1916年から1922年まで毎夏、測地学委員会の委嘱で重力測定（約280地点）。
- 1918年6月9日 鳥島で日食観測。同10月19日京都帝国大学理科大学助教授。
- 1920年9月1日 古川龍城氏らと天文同好会（後の東亜天文学会）を創立。
- 1922年9月11日 文部省在外研究員として米英独仏（おもに米）留学出発。
- 1925年3月3日 帰国。同4月18日京都帝国大学教授。同7月20日理学博士。
- 1927年6月 奉天でポン・キンネケ彗星観測、同11月10日台中で彗星太陽面通過を観測。同12月英国 Goodacre 氏から 46cm 反射赤道儀を譲り受ける。
- 1928年12月末 台南で山崎・フォーブス彗星と画架座新星を観測。
- 1929年5月9日 スマトラで日食観測。6月ジャワで太平洋学術会議参列。
- 1933年6月 カナダで第5回太平洋学術会議に参列、のち米国を視察。
- 1934年12月 台北市で日本学術協会第10回総会に参列。
- 1935年4月 台中観測所の震災害を調査。同10月朝鮮、満州、華北を視察。
- 1935年7月 国際天文同盟黄道光委員会の初代委員長に推薦される。
- 1936年6月19日 オムスク（ソ連）で日食を観測。1937年3月1日勲三等。
- 1937年6月8日 ペルーで日食観測。同年広島県福山市外に黄道光観測所設立。
- 1938年5月30日 高等官一等、従四位。5月31日依願退職。6月13日正四位。
8月ストックホルムで国際天文同盟総会に出席、第2期黄道光委員長に推される。9月22日スウェーデン国天文史学名誉会員に推挙される。
- 1939年3月から6月まで満州と華北に遊ぶ。
- 1940年10月 田上天文台建設に着手、11月観測開始。1942年5月25日落成式。
- 1941年9月21日 台湾北部の富貴角で日食を観測。
- 1946年4月10日 衆議院議員総選挙に社会党公認で立候補35人中10位で落選。
- 1947年4月5日 滋賀県知事選挙に社会党公認で立候補して落選。
- 1948年8月25日 上田上村長に無投票当選、9月1日就任。翌年10月28日辞任。
- 1955年1月 創立者の名に因み、山本天文台と改名。

1958年4月19日 鹿児島県指宿市で日食を観測。

1959年1月16日 10時13分滋賀県草津市大路井町420番地で病気のため永眠。

(『天界』407号1959年に掲載された略歴を引用。先生の詳細な年譜については今後日誌、手紙等の資料の調査の進行とともに加筆・充実してゆく予定である。)



山本一清先生ご遺愛の文鎮：懐中時計を弄ぶ童子

56×28×59mm

目 次

口絵写真・資料	
報告会プログラム	
山本一清先生略歴	
山本一清先生資料の概要	富田良雄・・・1
太陽全面 CaII 線スペクトロヘリオグラム(1926－1972)	北井礼三郎・・・4
カルバー46cm 望遠鏡関連資料と	
山本天文台に保管されていた写真乾板の状況	前原裕之・・・9
山本一清博士と遺愛カルバー46cm 反射望遠鏡	坂井義人・・・11
山本天文台の映像資料と学術活動における映像利用について	山下俊介・・・18
山本天文台の気象測器	武田榮夫・・・23
山本天文台に保存されていた望遠鏡の模型	大西道一・・・25
天文歌考	富田良雄・・・27
あとがき	・・・32



開会挨拶をする柴田天文台長

山本一清先生資料の概要

富田良雄

1 京都の天文学の偉人

京都の天文界をリードした二人の偉人がいる。ひとりには京大宇宙物理学教室創立者であり第八代京大総長、第二代上海自然科学研究所長をつとめた新城新蔵である。もうひとり方は東亜天文学会創立者のひとりで初代花山天文台長をつとめた今回の主役山本一清である。



新城新蔵博士 (1873-1938)



山本一清博士 (1889-1959)

新城の塊集していた漢籍・古典籍等は没後の1943年に国立国会図書館に買い上げられ新城文庫と名づけられて閲覧に供せられている。書簡や写真等は女婿であった荒木家に保管されていたが、2000年に宇宙物理学教室の図書室に寄贈され、京大新城文庫と命名され研究用に公開されている¹⁾。山本の資料は今回はじめて京大に寄贈されたものである。

2 経過

山本の資料は、京大を辞した後に実家に建造した田上天文台²⁾ (のち山本天文台と改称) にあり、山本が死去した後も永らくそのまま手付かずにて保管されていた。筆者は反射鏡研磨の達人と評された中村要の伝記を出版するため、2000年頃に山本天文台を訪問したおりにその膨大な資料の一角を拝見した。山本天文台の中心的存在であったカルバー46cm 反射望遠鏡は数奇な運命をへて、信州の山奥の小川天文台に保管されていた。それから十数年が経過して、このたびその両者が時を同じくして京大に寄贈される運びとなったのである。

反射望遠鏡をめぐる経緯については寄贈くださった坂井義人氏が一文を用意されているのでそちらを一読してほしい。山本天文台資料は、昨春柴田花山天文台長から山本家に問い合わせの手紙を送り、秋に親戚の成子氏の仲介により総合博物館、花山天文台の関係者数名が訪問して現状を確認することができた³⁾。またその際に山本家から全資料の京大への寄贈の意向が伝えられた。今春二度にわたり資料受け入れ準備のため京大研究資源アーカイブの五島を中心に見積調査が行れた。そして6月下旬に搬出・京大搬入となった。



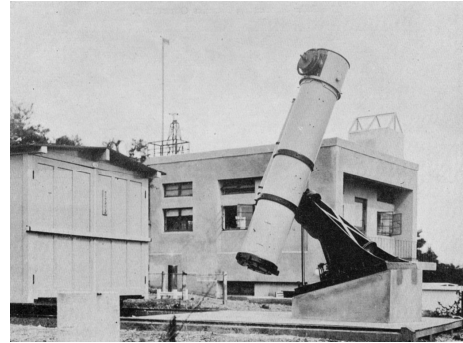
草津川土手から北に山本天文台を望む。



山本家の門。中間部屋の上に第一観測室がある。



左が研究棟、右が土蔵の上に増築された第二観測室



花山天文台に設置されていた頃の
カルバー46cm 反射望遠鏡⁴⁾

このようにして半世紀ぶりに山本天文台資料の全容が明らかになる端緒が開かれたのである。

3 資料概要

今回の資料はつぎの3つの部分からなる。1) カルバー46cm 反射望遠鏡とその関連資料、2) 観測関連道具類、写真乾板、3) 書類(書籍、雑誌、私信、その他) 約 600 箱である。このうち1) は長野県小川村の坂井氏からの寄贈品で花山天文台太陽館地下室に保管、2) と3) は山本天文台からの寄贈品で、2) の写真乾板は花山天文台太陽館 1 階に、2) の観測道具類等と3) は京大北部総合教育研究棟(益川記念館) 205 号室に保管されている。



保管室物品コーナー



書類のつまったダンボール 600 箱の山

4 今後の調査・構想

山本天文台資料は膨大であり、今後数年をかけて整理作業と調査研究がおこなわれる予定である。そしてまとまったものから研究資源アーカイブとしてデータが公開される。カルバー望遠鏡については組み立て修復・復元をおこない花山天文台敷地内に動態で展示できるように考えている。この望遠鏡は製作されて百年以上が経過しており、第一線での研究用に供することは無理であるが、天体観望などを通じて市民に親しんでもらうことは可能であると考えている。また道具類と書籍などの一部を用いて山本先生の書斎を復元し、日本の天文愛好家の育成をはかり世界をリードした先生のしごとのようすを見学者に実感してもらえるようにしたい。



三角屋根回転ドームの内部（魚眼レンズ撮影） 望遠鏡のピアーを貫き地下室までつづく深さ 7m の縦抗

搬出作業が済んで後、京大建築学教室の山岸先生の指導のもとに天文台建物の調査が始まった。滋賀県の近代化遺産の調査は平成 15 年ころに終了しているが、当然建築遺産として登録されていなければならないはずの山本天文台は抜けていたそうである。8 月 20 日から 5 日間かけて元滋賀県文化財課の建築コンサルタント、学生数名がはいて調査をおこなっていただいた。結果についてはその概略を報告いただくことになっている。

参考文献

- 1) 新城文庫目録、新城文庫研究会、2000.
- 2) 『天界』、第 34 巻、第 344 号、田上天文台特集、1953.
- 3) 第一回京大天文台アーカイブプロジェクト報告会収録、2011.
- 4) Publications of the Kwasan Observatory, vol.1, No.1, 1929.

太陽全面 CaIIK 線スペクトロヘリオグラム (1926 - 1972)

京都大学大学院理学研究科附属天文台

北井礼三郎

§ 1 はじめに

第1回の天文台アーカイブプロジェクト報告会においては、飛騨天文台に保管されていた生駒観測所の CaIIK 線スペクトロヘリオグラムについて簡単に報告をした。今回、山本天文台において、生駒観測所での観測以前に京大天文台、花山天文台において観測された乾板が保管されていることが判明した。ここではすべてのスペクトロヘリオグラム乾板資料についてまとめて報告する。

京大における太陽全面スペクトロヘリオグラフ（分光写真儀）観測の歴史は、

- ・ 1926 年アスカニア社製太陽分光写真儀を購入し、シデロスタット望遠鏡で CaIIK 線による彩層全面観測開始
 - ・ 1929 年同写真儀を花山天文台に移し、30cm シーロスタット望遠鏡にて観測継続
 - ・ 1941 年同写真儀を生駒山観測所に移し、以降 1969 年まで継続し終了
- である。1926 年から 1969 年の間、一つの観測機器を用いて連綿と連続観測されたことになる。図 1 は、1930 年代に花山天文台での機器配置の様子を示している。

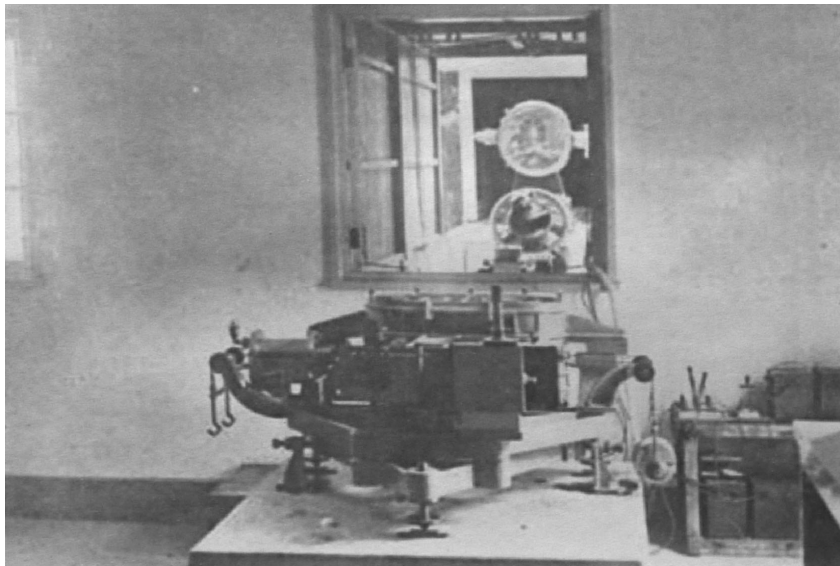


図 1： 1930 年代の花山天文台での機器設置風景。室外にあるシーロスタットで太陽光を取り込み、室内に設置された（風景撮影者の背後にある）焦点距離 5m、口径 20cm の Steinheil 鏡によって直径 5cm の太陽像がスペクトロヘリオグラフの第一スリット部に結像する仕組みである。

図 2 には、乾板資料のサンプルを示す。乾板の陽画プリントを図 3 に示す。

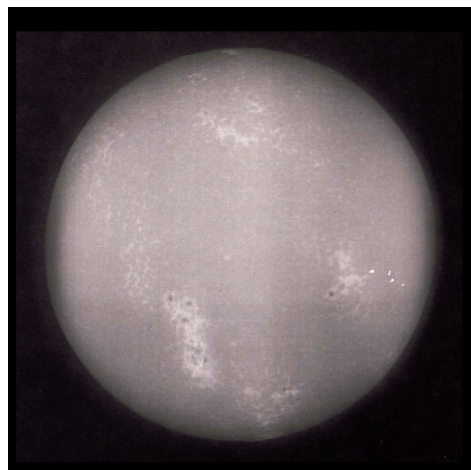
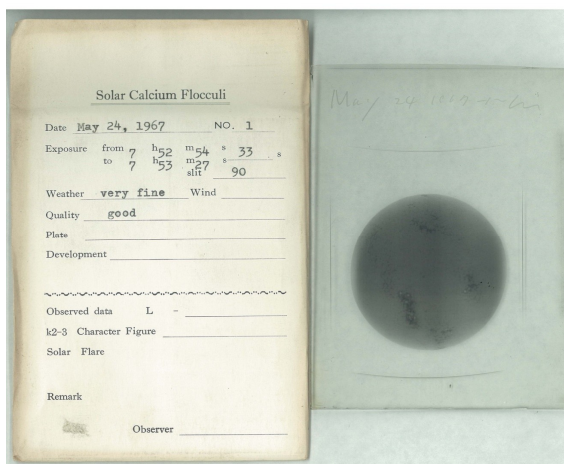


図 2 : 乾板資料 (袋に収納されている)

図 3 : CaIIK スペクトロヘリグラフ

§ 2 スペクトロヘリオグラフ (分光写真儀) の現状

アスカニア製スペクトロヘリオグラフは、現在花山天文台の歴史館に保管展示されている。以下の図 4 に装置の全景、図 5 に各パートの写真を示す。



図 4 : アスカニア製スペクトロヘリオグラム全景

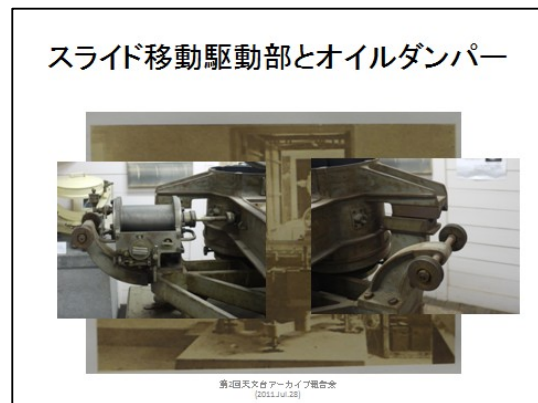
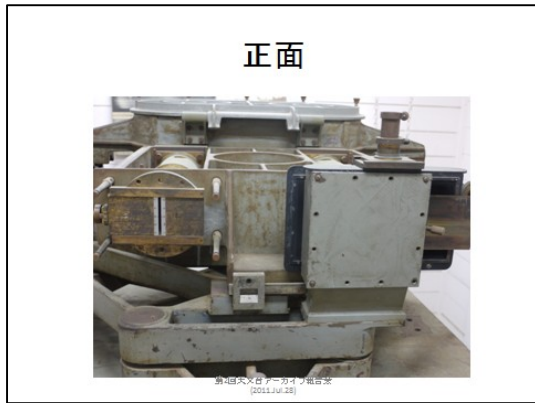


図5：スペクトロヘリオグラフ各パート

§ 3 乾板資料の整理

乾板資料は、まず保管袋に記されているメタデータを集録することから整理作業を始めている。作業は以下の担当で実施されている。

- 生駒乾板のメタデータファイルの作成
 - 飛騨天文台（白川、門田担当）
 - 1940~1970 間の 8 割入力済
- 追加データ（山本天文台）
 - 1926~1940 間の乾板
 - 北部総合教育研究棟（益川記念館）
 - 羽田（天文台 RA)担当

これまでのメタデータ収録結果から、観測日の分布の様子をまとめたものが、図 6 である。

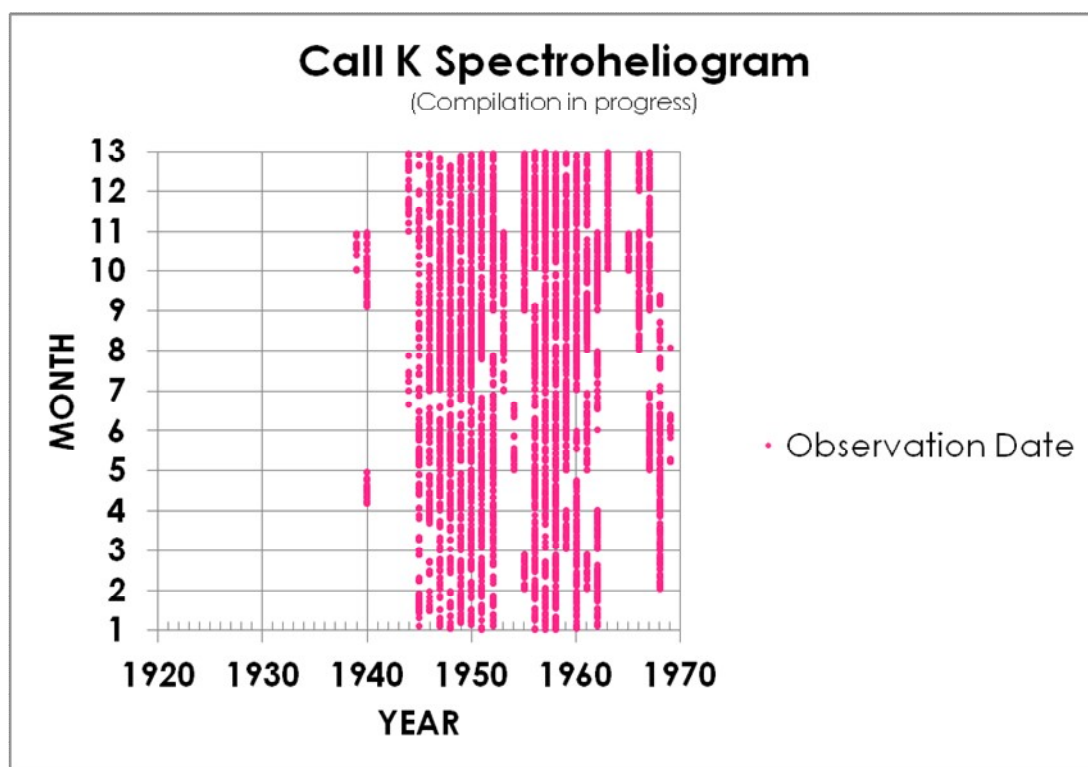


図 6 : CaII K スペクトロヘリオグラフ観測日分布。1926 - 1945 間は現在整理中である。

§ 4 乾板データのデータベース化とその解析プラン

乾板のメタデータ集録作業が完了し次第、乾板をスキャナーでデジタル化し画像データ

ベースに統合する計画である。この画像データベースの構築には、

- 京大・理・附属天文台(北井、柴田、上野、前原、白川、門田、羽田)
- 京大・理・宇宙物理学教室 (冨田)
- 京大・博物館 (五島、山下)
- 京大・生存圏研究所 (林)
- 京大・宇宙総合学ユニット (浅井、磯部)
- 国立天文台(花岡)

のメンバーがあたることになっている。このために、

- 平成 23 年度国立天文台共同研究(代表：北井)
 - スペクトロヘリオグラム乾板データによる太陽周期活動の研究
- 平成 23 年度生存圏ミッション研究(代表：北井)
 - 1926 年–1940 年の太陽活動画像データベースの作成

の研究補助をうけて実行する。

更に、このデータベースを IUGONET を介して公開し、

- 40 年間の太陽活動の研究
- 40 年彩層変動ムービーの作成
- CaIHK (羊斑(明るい部分) の長期変動の研究
 - 面積・輝度測定
- 地球上層大気を加熱する太陽放射 (UV) の Proxy Index 利用
 - 横山、増田、佐藤 (2005) : CaII K プラージュ面積と UV 照射の間
の正相関

といった解析を行うことを計画している。この地球上層大気加熱問題の研究では

- 平成 23 年度名古屋大学太陽地球環境研究所「地上ネットワーク観測大型共同研究」
 - 太陽画像データ解析に基づく、超高層大気への太陽紫外線の影響(代表：浅井)
 - 太陽極端紫外線画像データなどに基づいて地球の超高層大気に影響を及ぼしやすい太陽紫外線放射量の要因を把握すること、また過去の太陽彩層画像データから長期にわたる紫外線放射量やひいては超高層大気への影響を推定することを目的とする。

との間で密接な交流を図りつつ、研究の実をあげる計画である。

カルバー 46cm 望遠鏡関連資料と山本天文台に保管されていた写真乾板の状況

前原裕之(花山天文台)

1. カルバー 46cm 望遠鏡と関連資料の搬入

カルバー 46cm 望遠鏡は 1929 年に輸入され、最初は花山天文台に設置された(図 1)。しかし、山本一清博士の京大退職後は花山天文台から山本天文台に移設され、観測に使用されていた。その後、さらに山本天文台から月光天文台に移設され、最終的に富田学園高校天文台(岐阜市)で使用されていた。1980 年頃からは解体された形で、岐阜県小川村の小川天文台で保管されていた。

長らく小川天文台を運営されてきた坂井氏から、望遠鏡本体と関連資料が京都大学に寄贈されることになり、2011 年の 6 月 13 日に花山天文台の太陽館への搬入を行なった(図 2)。

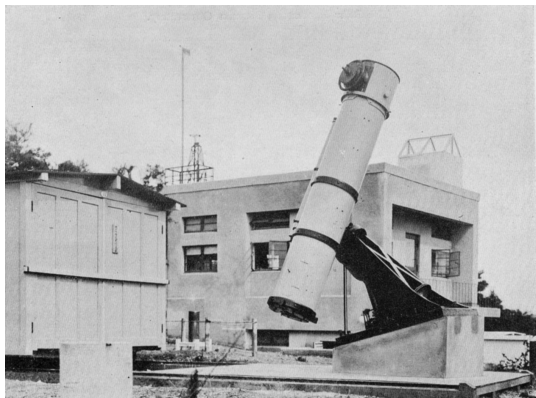


図 1:花山天文台に設置されていた頃のカルバー 46cm 望遠鏡



図 2:6 月の搬入作業の様子

寄贈・搬入された主な物品・資料を図 3~8 に示す。



図 3:望遠鏡の鏡筒



図 4:架台部分と鏡筒の一部



図 5:13cm シュミットカメラ



図 6:星座投影機



図 7:書籍など



図 8:46cm 主鏡

現在のところ太陽館の地下室で、搬入時のまま保管している。地下で室内の湿度が高いため、除湿機 2 台を設置している。今後の保管/公開などの方法などについてはまだ未定である。

2. 山本天文台保管の写真乾板

2010 年 10 月に行なった山本天文台保管資料の予備調査において、山本天文台の第二観測室 1 階に 1920~1930 年代に花山天文台で撮影された約 2000 枚の太陽のスペクトロヘリオグラフによる太陽の単色全面像

(CaHK 線)の写真乾板が保管されていることが判明した。

また、山本天文台に保管されている資料が京大へ寄贈されることとなり、その調査が2011年4月と5月に行なわれ、その結果第一観測室の1階にも花山天文台で撮影された写真乾板が保管されていることが判明した(図9、10)。



図 9:第一観測室1階の乾板の保管状況(1)



図 10:第一観測室1階の乾板の保管状況(2)

山本天文台の資料の京大への寄贈に伴い、これらの写真乾板を6月28~30日に搬出し、第一観測室保管分は花山天文台の太陽館に、第二観測室保管分は北部教育研究棟に搬入した。第一観測室保管分の乾板には、彗星や小惑星、星雲星団、変光星の写真の他(図11~13)、ザートリウス望遠鏡と対物プリズムによって撮影された1934年のヘルクレス座新星(DQ Her)の分光写真(図14)も含まれており、非常に貴重な資料であるといえる。

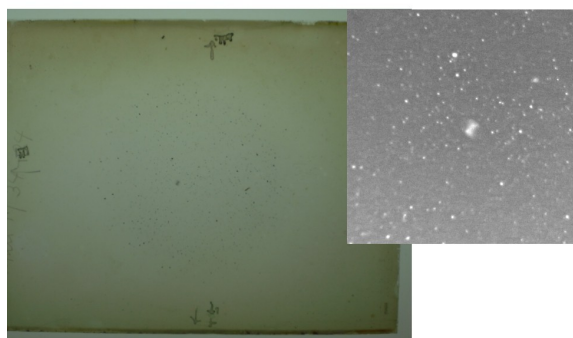


図 11:M27の乾板

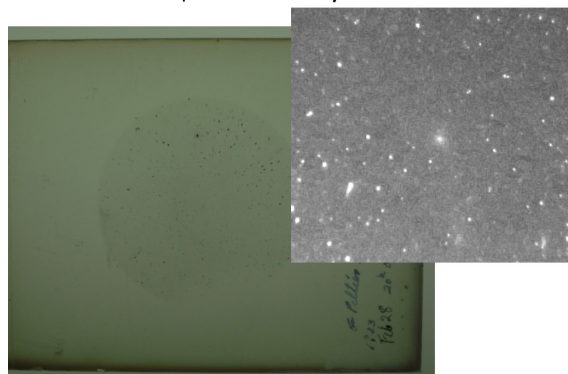


図 12:C/1933D1, Peltierの乾板



図 13:ζ Aur (食変光星)の乾板

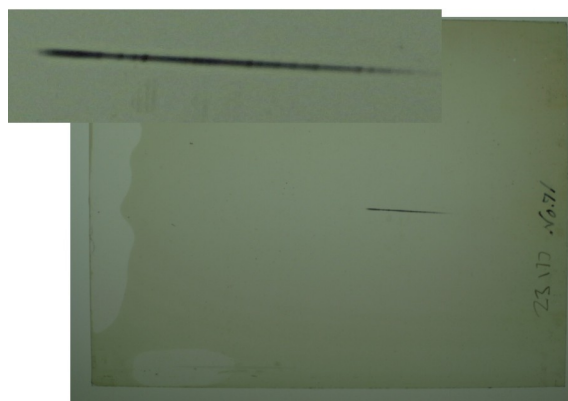


図 14:1934年ヘルクレス座新星(DQ Her)のスペクトル乾板

現在のところ、太陽観測の乾板については観測データの入力およびスキャナによる画像データの電子化作業が始まっている。また、彗星や変光星、スペクトルの乾板については、後の電子化に向けて数量の調査やおおまかな分類を行なっている段階である。

山本一清博士と遺愛カルヴァー46センチ反射望遠鏡

長野県小川村高府 坂井義人

1 はじめに

初代花山天文台長・山本一清博士は、わが国における初期の天文学、天体物理学の創生的役割を演じた人物として、その記憶に留められて既に久しい。

しかしながら、その学問的評価はさることながら、逝去後すでに五十年を経た現在にあっても、その行動とりわけ一般社会との緒帯とも言うべき、いわば私的活動における事跡とその功績については、未だ論ずべき諸点の多くが存在することも、また事実である。今般、京都大学博物館、宇宙物理学教室、山本家ご遺族様の合意の下に展開されつつある、博士の遺愛品寄付移管事業に際して、筆者も亡父・坂井義雄(誉志男)の悲願であり、私的所有をしたカルヴァー46センチ望遠鏡の完全保存を意図するに当たり、同望遠鏡その他を平成23年6月、寄付同意を前提として花山天文台に完全移管をなした。

以下は、山本先生と亡父との師弟関係を前提としたその意義と事実関係及び、特に先生の最晩年その周辺事象の紹介である。

2 カルヴァー46センチ反射望遠鏡について

以下の二枚の写真は京都大学花山天文台設置時と、その後に私設・山本天文台に移設された当時のカルヴァー46センチ反射望遠鏡の雄姿である。同望遠鏡は、1927年(昭和2年)の輸入直後より花山天文台構内に、移動式の簡易格納庫に収納され、その後は1938年(昭和13年)山本先生の大学退官後に伴い、生家の土蔵を改造した私設天文台に移置され使用され続けた。未だ東洋一の望遠鏡と謳われた誇らしい時代でもある。

この異なる二箇所でのカルヴァー望遠鏡の写真は、多分これまで同時に比較紹介されることも無く、今回が初めてのことではなかろうかと思われる。その所々の改良の差異等は、大変興味深い時代の生き証人とも考えて良いことであろう。加えて、山本先生最晩年のほぼ秘されたままの事跡についても、その概要を紹介することとしたい。

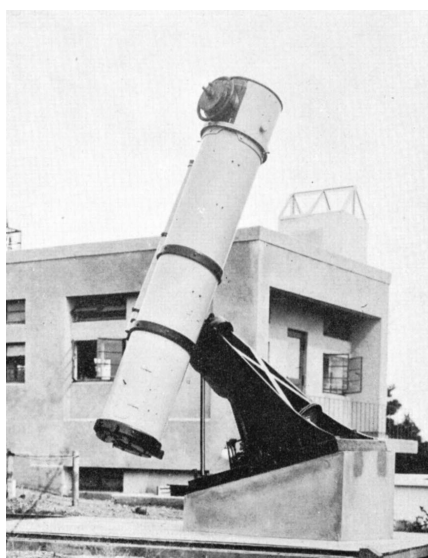


写真1 花山天文台設置時



写真2 山本天文台 昭和17年

3 イギリス天文家グドエーカーと山本先生の活動

カルヴァー46センチ望遠鏡は、先行して輸入された二台の30センチクラスの反射望遠鏡の後を受けて、再びイギリスより山本先生の手によって輸入された。とりわけこの望遠鏡は、イギリス天文協会(BAA)をフィールドとして、月面観測などに著名であった「ウォルター・グドエーカー氏」の愛機たる名機といわれ、細緻な月面観測の結果として世に問われた世界初の精密月面図を世に送り出したことからも著名であり、山本先生は、その性能に惚れ込まれての結果という。因みに先生は、一般世情にも有益な天文団体としての「東亜天文学会」(OAA)をその活動の初期から設立され、それは、イギリス天文協会を理想としてのことだったという。その意味からしても、イギリス天文協会かつジョージ・カルヴァーという望遠鏡製作者、そしてその結実としての46センチ望遠鏡は、先生をして誇らしき三種神器であったに相違いない。

しかしながらこの機材は、その輸入と購入に関する会計処理の不明瞭が元凶となって、当時の会計課長の立場にも及ぶ事案となり、結果、1938年山本先生の大学退官という一大転機に繋がっていく。このあたりの大学側の事情については、筆者はその材料を持ち合わせてはいないので、それらについては別の機会に譲ることとしたい。



写真3 山本一清博士
(1889-1959)

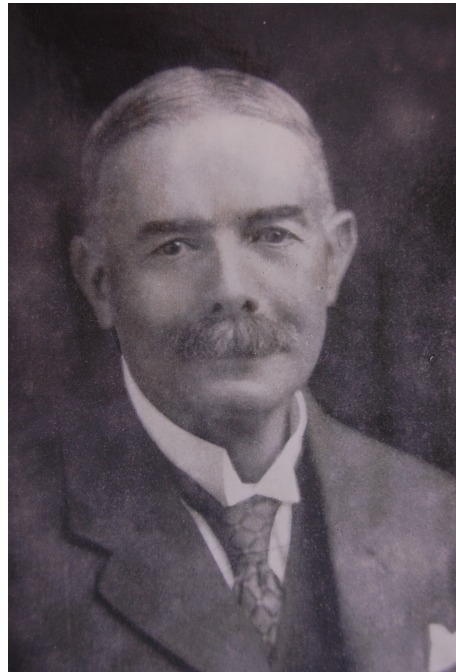


写真4 グドエーカー
(1856-1938)

さて、その活動と意思の強さの衰えを見せない山本先生は、それまで花山天文台を本部とした東亜天文学会の機能とともに、滋賀県上田上村のご実家に1940年(昭和15年)に私設天文台を設置し、それ以降は一市井の在野の天文学者としての活動に徹していくこととなる。言わば都落ちの平氏の公達にも比してのお姿とも言えぬことも無いが、故・渡辺敏夫先生の回顧によると、不自由な官学生活から解放されて自由の身になられたのは、先生の初志貫徹の意味からも良い機会であったろうと積極的な評価を述べておられる。

このような経緯を経て、田上(たなかみ)天文台は、世界にも稀なる民間天文研究施設として、積極的に先進情報を絶えず発信していくこととなる。火星研究家のパーシバ

ル・ローウェルの「ローウェル天文台」にも比肩する活動成果と言い得よう。1955年に同天文台は、山本先生の名を冠して「山本天文台」と改称され、逝去されるまでの約二十年間に亘り、その活動を展開していくこととなる。未だ語り尽くせぬほどの事跡は、わが国の天文界おいての遺失すべからざる記憶となって、今日に至っている。

現在では、時勢の赴くところと相まって、東亜天文学会は一分野における一学会の原則化のため、アマチュア界の個別団体の一つとして活動を余儀なくされたとは言え、しかし東の官営に対する西の民の思想の継承とその重要性において、同会は山本学会と言って良いほどの誇りに満ちた歴史を刻んできたと言って差し支えない。今般の山本天文台遺品類の保管と研究は、その意味をなぞる大変重要な位置づけとなり、その出発点の契機となることは疑い得ない。以下の私設天文台写真は、山本先生のその活動の一端を物語るものとして、ご高覧を願わしく思う次第である。

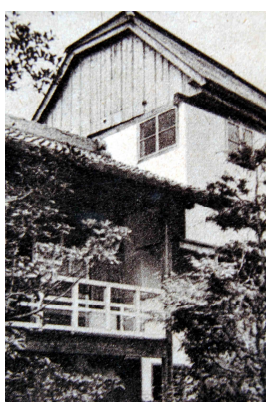


写真 5



写真 6

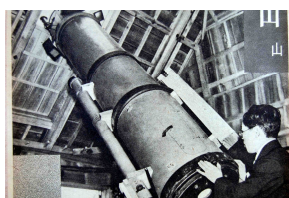


写真 7



写真 8

これらの写真は上田上村での山本先生ご自慢の天文台と、その概観である。写真 5 は、観測室屋根上部が回転し、その中には、カルヴァー 46 センチ望遠鏡が設置されていた。改良のお好きな山本先生は、絶えず工夫を凝らされ続けたと言う。

また、別の観測室の 15 センチ反射望遠鏡の前での眼視観測の山本先生像は極めて珍しい。加えて写真 8 は、天文台内の研究室内部で、貴重な中国南宗時代の天文図拓本などが掲げられている。

4 三五教中央天文台とカルヴァー46センチ望遠鏡の変遷

さて、世界的にも稀有な存在の山本天文台は、先生 68 歳にいたる長きに亘り、東亜天文学会とその会員の育成を一身に担い、アマチュア天文学の確立に日々努力をされた。それらの証言は各所で語られ、刊行物に幾度も紹介をされ今日に至っている。我田引水ではあるが、筆者にとっての最大関心事たる先生の最晩年にいたる二年間についての足跡は、稚拙な駄文ではあるが、京都大学宇宙会雑誌に一年一回のペースで紹介を頂いている。

そのような先生の活動もピークを迎える頃、未だに多くは明らかにされていない特異な活動に、先生は身をも以って転進を図られることとなる。いわゆる 1956 年を境としての、世に言う三五教天文台協力の時代である。政治と宗教にも関心も持たれた先生の生涯最後の大転進とって差し支えないであろう。

三五教と書いて「あなない教」と呼称する神道系教団との蜜月時代の始まりであった。三五教団は、京都の綾部を本拠とした、いわゆる大本教団よりの独立的立教を経た、神

社神道の系譜とは異なる古い形態の教派神道というべき宗教団体である。そして、その立教の趣旨「天文と宗教は一如なり」との神託を受けての、天文を標榜するような特異な宗教活動を展開した教団でもある。因みに、皆既日食を思わせる天照大神の「天岩戸神話」を始め、古事記に留められる多くの日本神話は天地開闢を説諭し、いかにも天体を意識させるような形態を整えている。また、三五教団の崇敬する神としては、「国常立命」(クニトコタチノミコト)、出雲大社の主神「大国主命」(オオクニヌシノミコト)、そして教団開祖の中野与之助師を「大道彦命」(オオミチヒコノミコト)と仰ぎ、その三柱を祭神として信仰の対象としている。天地開闢以来、人間は星・太陽とともに生き、農耕の民としての国づくりを実践してきたという、日本の歴史と神話を具現化して行こうという教えと言っても差し支えないであろう。具体的な活動の展開は、各所に天文台を作り上げ、その後には現在の国の ODA 活動を先行させたような、発展途上国の農業指導をはじめとする産業開発などに、その活動の発露は求められた。初期の山本先生の教団に対する天文指導は、現在では、静岡県函南町の月光天文台、また途上国の支援を目的とする公益法人・オイスカインターナショナルの設置などに帰結され、宗教活動とはその一線を隔しつつ、社会還元が図られ今日に至っている。

さて、当時の具体的展開については、三顧の礼を以って教団側は山本先生を迎え、その結果として、まず天文台作りが熱狂的に開始される。それは当然のことながら宗教活動としての天文であり、精神天文なる造語の合言葉の下に開始された。山本先生もそのあたりは既に気づいておられたようで、「・・・この山本だから協力するのであって、他の誰もそうはしないだろう・・・」との述懐は、その後の暗雲垂れ込めるが如くの前途の不幸を暗示させている。宗教活動というものは、どうしても資金の調達と、その用途に不幸も生じさせる。以下、教団天文台はアナナイ系天文台と呼称することとするが、まずは教団側の根拠地の一つとして、静岡県沼津市香貫山山頂に天文台作りを開始する事に向かっていった。



写真 9



写真 10



写真 11



写真 12

三五教団と山本先生晩年との関係は、論述してきた通りである。その関係は逝去に至るまでの僅かに二年程度ではあったが、先生の生涯を論ずるには重要な時期でもある。

写真 9 は、三五教団関係者との懇談で、右端は中野与之助開祖。写真 10 は沼津市香貫山中央天文台で、内部にはカルヴァー望遠鏡が設置された。写真 11 は沼津市で行われた天文祭りの折の、馬上衣冠束帯装束の山本博士である。また、信徒組織に対しても、天文講演などが開かれたといわれる。

当時の正式名称は「アナナイ中央天文台」と命名し、また清水市(現・静岡市)の教団本部内には、「アナナイ天文暦算局」として、山本先生を局長として推戴している。そのような進捗を見せてはいたが、しかしながら、沼津市の小高い山に造営された中央天文台には、いわばご神体とも言うべき、観測望遠鏡の選定が頓挫のままだったという。

多分、資金の調達に窮したこと、また当時の光学技術のレベルでは、計画した口径 30 センチクラスの屈折望遠鏡の製作も困難な状況だったとも考えられる。この問題は最大の山場を越えつつあったものの、中途の頓挫は山本先生にとっては耐え難い事であったろうと想像される。

「この山本が関与して、望遠鏡が無いというわけには行かない」との言葉は、先生をして大きな選択を招来せしめる結果となっていった。即ち、「中央天文台の開台に際しては、山本のカルヴァー46 センチ望遠鏡を移設しそれに備える」との結論に至ったと言われている。花山天文台から着陸したこの望遠鏡は、再び緊急離陸を迫られ、そして悲しむべき結果として山本天文台飛行場には、二度と戻る事は無い不幸の前触れでもあったとしか言いようが無い。蓋し、それは直後に山本先生の逝去にも遭遇することとなり、望遠鏡にとっては、急流に流される木の葉にも似た事態だったと言い得よう。

加えて、三五教団の信者組織(主会)は、九州を始め全国各地に点在し、その土地その土地での天文台作りを計画し始めていた。その規模は、東北、信濃、濃尾、四国を含めて十ヶ所にも及び、山本先生の逝去を挟んで、観測機材も口径 20 センチクラスの屈折、そして中口径の反射など本格的な赤道儀型のものが導入された。その時代としては、後に訪れる自治体組織の教育センター、児童館などの教育公開的施設の魁とも言い得る内容で、決して劣るものでは無かったことを付言する。

ただし、山本先生としては、未だ中央天文台の陣容すら中途のままなのに、それらの整備を急ぐには時期尚早の感を否めなかったのもまた事実であった。このような各所での建設の模様については、亡父・坂井義雄も多くを関与し、また機会を設けて稿を改め詳述したいと思う。今も観測天文学には継続され続けたらと残念にも思う次第である。

さてかかる経緯を踏まえて、とにもかくにもあわただしく、沼津市の天文台は落成した。上記の写真 10 がそれにあたる。これが天文台かと思えるような外観であるが、大屋根の部分が少し回転したように見えるのではないだろうか。神道の神社本殿を模したこの建物の中に、実はカルヴァー46 センチ望遠鏡は急いで移設されて鎮座したのであった。1957 年(昭和 32 年) 9 月 21 日開台当日の事であったという。

宗教団体の祭事としては、写真 11 に三五教天文祭りを開催した折の馬上の山本先生の得意満面のお姿が見て取れようか。単なる時代祭りの折のゲストとも言いえぬことも無いが、先生は自ら望んで衣冠束帯の装束に身をつつみ、およそキリスト教徒からは目を疑う如くの光景ではあろうが、その評価は未だ尽きかねると申し上げるより他は無。開台後は連日の天文台見学者の数も、息をつく暇も無かったと聞き及ぶ。

またその前後の一年間は、写真 12 のように清水市の本部の拝殿を背に、天文の博学ぶりを多くの信徒相手に語り続けたという。先生にとっては、宗教に対しても多角的な関心を持っておられたといい、決して同床異夢とは言えなかったのでは無いのかと、筆者は今も考え続けている。いかなるご心境だったのか、今もご存命ならば、より詳しくそのお考えをお聞きしたかったと思えてならない。

このような関係は深まりつつあったとはいえ、先生にとっては当初の約束事とは異なる教団の施設作りに対して、徐々に懐疑的になって行かれたようである。資金手当て研究費の支給に対しての見解の相違などがあったと観せられる。また上述の如く、各所の観測所設置に対しての指導性の対立でもあったようである。中央天文台開設後の 1958 年秋ごろ、本部付教団幹部との意見相違は、先生をして滋賀県のご実家への一時

帰郷などとして現れ、そして、その半年後の1959(昭和34年)年1月16日午前中、病氣療養中の薬石効無く逝去されていかれた。

享年70歳、私的弟子であった亡父には、呆然自失の日となったに違いない。「坂井君・・・僕は一時帰宅しただけだよ、また教団は迎えに来るだろう」、と漏らされたというお言葉は、長男の筆者にとっても救いの一言として心に響いている。本当のお気持ちとお言葉だったろうと信じて疑わない。しかし、アナナイ天文台、そして三五教団との関係はこれで終焉を迎えた。このあたりの経緯は、ご自身の東亜天文学会の会誌にも、またどなた様にもほとんど語られることは無かった。亡父を含めた教団指導の経験者数名の者のみの知るところ言って構わないであろう。そして、カルヴァー望遠鏡はそのまま取り残される憂き目見ることとなる。その後、ご令室英子様とご遺族のお気持ちを挺して、亡父は望遠鏡の引きとりと、新たな嫁ぎ先を見つけるべく、奔走する事に繋がっていく。何ゆえ、望遠鏡は山本天文台に戻されることは無かったのか。これには慎重な検証が必要とされるであろう。ご遺族様にとっては、東亜天文学会運用に際する思案の末のことであつたらうと、現時点では推量をするのみである。大学退官後の先生にとっては、虎の子の学会であつたはずであり、山本家ご一統様のその二十年に及ぶご苦勞の程が偲ばれる。

アナナイ系天文台に進んで協力していかれた真の背景には、これらの傍証が必要欠くべからざると諸点と思われて仕方が無い。

カルヴァー望遠鏡は、その後一年余を経て、1962年に亡父根拠地の岐阜市の私立富田学園高校に、自己の望遠鏡工場にて一部改良を施して、売却移設をされた。筆者なども少年の頃の遊戯として、大きい鏡筒の中に潜り込んだ記憶が蘇る。売却時の価格などは、筆者も不知のままで終わっている。

設置場所は5階建の特別教室屋上の小さめのドームではあつたが、何はともあれ、学校教育という場を与えられて、望遠鏡にとっても、再び幸多き門出であつた事だろう。その後の推移は、彗星発見者としても名を馳せた天文部顧問・森敬明氏の指導などにより、高校生の実習などに二十年弱は使われた模様である。しかし乍ら、その後は老朽化も手伝い、全く省みられなくなって、その折には学園側より引き取りを約定した亡父の手により、平成の時代に入った頃に保管をするに至った。亡父青春期とアナナイ天文台での恩讐がそうさせたものなのだろうか。しかこれも残念ではあるが、亡父の体力低下と平成14年の逝去を挟み、またその他の事情も手伝って復活させる事もできず、放置の状態に墮し続けた。色々な復元の可能性を検討はしたが、筆者の非力を一身に恥じ入るばかりである。

このような経緯を辿って、行く末の見えぬままの平成23年2月、滋賀県の山本天文台施設の貴重な先生遺品類全品の京都大学保存移管の知らせがもたらされた。かねてより、陰日なたとなつてご厚誼を頂いていた宇宙物理学教室・富田良雄氏より、その朗報がもたらされたのだった。感極まるとはこういうことなのであろう、直ちにこの案件を一緒に考え続けていただいた富田氏に、カルヴァー46センチ反射望遠鏡を主として、保存すべきと思しき遺品類の提供を申し入れた。柴田花山天文台長にも同意を頂いた旨をお聞きし、その時点から、物品の整理と保管に向けての戦いが開始されたのだった。膨大なる山本遺品に比べ、二トントラック一台分程度の分量など、それほどはたいした量ではない。京都大学には、ぜひ継承いただきたい物品内容の精査をしつつ、山本遺品には欠くべからざるカルヴァー望遠鏡を提供できた事は、何にもまして意義深いことと自己評価を続けている。筆者も整理等の協力を勘案し、今後に備えたいと思う。

5 花山天文台への機材の寄付移管

2011年(平成23年)6月13日、京都大学花山天文台にカルヴァー46センチ望遠鏡は、寄付を前提としてその移管を敢行し、作業は無事に終了した。長野県の保管場所から亡父愚息たる兄弟二人によつての運搬作業は、過去に幾多を経験したとは言え、一日での往復はなかなかの体力の要るものとなった。二十年昔ならばいざ知らず、還暦間際の重量数トンにも及ぶ運搬は、身にも応えた。しかし、賽の河原の石積みは、とにかくこれで基礎部分は積みあがった。望遠鏡も最初の任地に帰巢し、擬人化すれば高齢者ホームに入居をしたのと同じ感慨を持つ事だろう。果たして山本一清博士と坂井義雄の鎮魂に資する事ができたであろうか。望遠鏡とともに、鎮座したに違いないと今は信じたい。祖父にも近い一清先生、そして血脈は無いまでも精神的に先生を親とも慕った坂井義雄。愚息二人は少しでも、二代への親孝行となったのだろうか、それとも親不幸とも言うべきなのだろうか。今は、花山天文台と京大博物館に委ねる事を幸と想いたい。

なお付け加えさせていただく事をお許しいただければ、この他にも、多くの天文諸物を一緒に委ねさせていただいた。またの機会に詳述を試みたいが、岐阜金華山・岐阜天文台及び、岐阜県飛騨にて私的に展開した斐太彦天文処(ひだひこ・てんもんしょ)にて使用した坂井義雄の遺品類である。一例を挙げれば、山本先生の指導に基づいて試作したと思しき口径12センチ・F1.2・視野20度にも及ぶ小型シュミットカメラ、また、天文教育目的としての平面投影の「江上式星座投影機」(星座早見に擬した)など、余り見かけないであろう稀有な機器類、そして、故・渡辺敏夫先生より譲られた書籍類、加えて、亡父手書きの山本先生名著「星座の親しみ」冒頭部分掲示看板・写真16などである。



写真13 機材運搬



写真14 46センチ鏡



写真15 花山天文台

6 星座の親しみ(結語に代えて)

以上が、この望遠鏡の有為変転の概要である。初めてお聞きになる方も多いのではないかとも思われる。未だ明確では無き事も多いはずであり、筆者の理解不足もあるものと思われる。多くの未公開情報と評価の出されることを願うのみである。結語に代えて山本先生の珠玉の名著「星座の親しみ」の冒頭部分を掲げて、本稿を閉じるにあたり、より多くの実りを期したいと心より願う次第である。

星の光は、これを仰ぎ見る人の心に、真摯の情を養い、又その整然たる運行は、これを知る人の胸裡に、厳粛の思いを呼び起こすものであるが、大星小星の神秘的な配列によっていざなわれる星座の親しみは、我々に真の美と真の平和を味わせる。

・・・・中略・・・・

カーライルにならって

仰ぐ頭上の星々の、今半ばも知っていないこの自分に、人は何故、これを教え親しませてはくれなかったのだろうか・・・・。と、かこつ人は、あわれ、天地の美を、既に半ば失った者であると言うべきか！

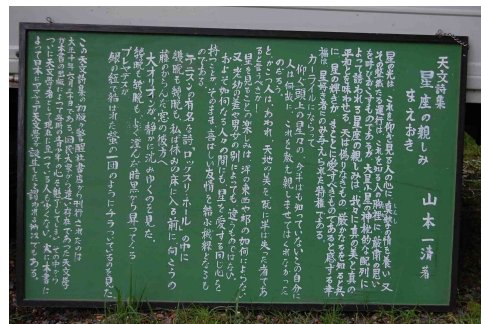


写真16 山本一清 「星座の親しみ」

平成23年・2011年9月脱稿

山本天文台の映像資料と学術活動における映像利用について

京都大学総合博物館 / 京都大学研究資源アーカイブ

山下俊介

はじめに

山本天文台資料には、映画フィルム等に記録された映像資料、およびそれらを撮影・映写した機器等が多数含まれている。ここでは、それら映像関係資料を紹介するとともに、山本天文台および山本一清博士の学術活動における映像利用について考えてみたい。

1. 映像関係資料の概要

山本天文台からの搬出の際、撮影済みフィルム等の段ボール 4 箱に加え、3 種類のフィルムフォーマット (9.5mm、16mm、35mm) に対応する撮影・映写機器セットが確認された。フィルムセメントやスプライシングⁱの道具も見られ、山本天文台で映像フィルムの簡易的な編集を行っていたことがうかがえる。なお、資料の搬出元 (資料の原所在位置) は、おもに研究室 1、および研究室 1 の 2 階部分にあたる部屋 (部屋表札では「第四研究室」) の二室である。

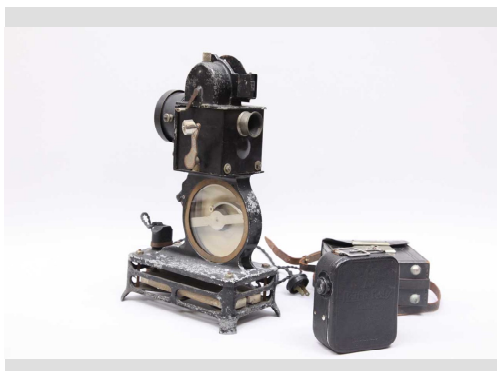


図 1: パテベビー (9.5mm 映写機とカメラ)



図 2: 箱 1 内 番号 f-4 16mm フィルム (PERU)

2. 映像資料についてⁱⁱ

箱 1 は、1937 年のペルー日食観測に関する 16mm フィルム、1936 年の日食観測に関する 9.5mm フィルム、1948 年礼文島ビーズ日食に関する写真投影用 35mm 長巻きフィルムⁱⁱⁱ、購入された上映用 16mm および 9.5mm のフィルム群からなる。缶ラベルやリーダー部の記載によっておよその内容が推定できるものが多いが、映写しないと判明しないものがある。その他、内容を示唆する記載のあるリーダー部なども残されており、内容不明フィルムの照合の際に重要になると考えられる。

9.5mm フィルムは、大半が上映用の購入フィルム^{iv}であり、その資料的価値は天文学外に求められる可能性が高いが、観測・撮影機材に関する内容を推定できるフィルム^vも一部含まれる。



図 3：箱 1 f-7/f-9 16mm



図 4：箱 1 b-1 内資料

箱 2 中の小箱内には、16mm フィルム 20 巻とフィルムリスト、および映写機用の機械油が見出される。16mm フィルムの大半は、リール表書きやリストに都市名などが記されており、国外視察調査や国際会議参加等のおりに撮影されたものと推定できる。同封されていたフィルムリストには、通し番号と共に「着英」「Kew」「Richmond」「Windsor」「Munchen」「Paris」「Lisbon」「Berlin」「N.Y.」「水沢」などの地名が並んで記されており、それぞれフィルムラベルやリーダー部に書かれた地名と対応している。さらにリスト上部に赤ペンで加筆されている記載「天界 XIV, 78」を、雑誌『天界』に探してみると、該当部分は「リスボンの川崎理学士より」という、1933 年の川崎俊一技師の滞欧報告記事であり、これらのフィルムの少なくとも一部は川崎技師による撮影の可能性が考えられる。しかし、その後、川崎技師が渡米したのか（「18 N.Y. Arrival」）、あるいはリスト内の「5 Royal Air Force Display 1932-6-25」のような渡欧前年の撮影と思われるフィルムの由来については現段階では明らかでない。山本博士の手元に残されていた理由（由来・履歴）については、書簡や日誌といった他の資料群から検討出来る可能性がある^{vi}。



図 5：フィルムリスト



図 6：「着英」ラベルのあるフィルム

箱 3 からは、1937 年のペルー日食での観測データを記録した 35mm フィルム 3 巻が見つかっている。うち 2 巻は缶ラベルに題名表記あり（「ペルー日蝕」「ペルー日蝕 2」）、表記なしの分も同様の缶ラベル・外観であり、一連のペルー日食観測に関するものと考えられる。

箱 4 の木箱上面には「小型映画 部分品」、側面に「Movie PARTS」と記されており、内容は 6 本のフィルムリーダー、3 本の短いフッテージ、フィルムカッター、紙やすりなどであ

る。全てのリーダー部には連結されていたフィルムの撮影内容を示す情報（「Yerkes」「Ariz」など）が記されており、箱1のそれと同様に不明フィルムの同定の際に重要である。

なお、35mm 映写機の収納箱内に、映写用リールに巻かれた状態の 35mm フィルム 1 巻が残されている。フォーマットや形状から考えると箱 3 から見つかった 3 巻のフィルムと共にペルー日食に関するものであると考えられる。

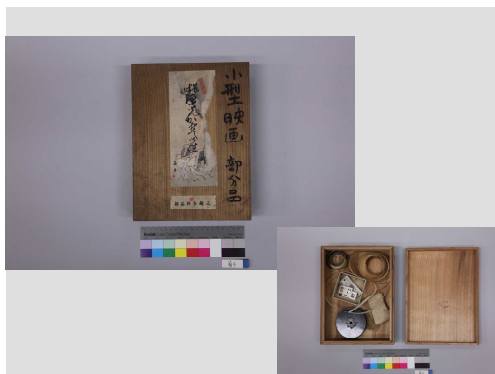


図 7：箱 4(木箱)の外観と内容



図 8：映写機収納箱内の 35mm フィルム

3. 撮影・映写機器について

9.5mm フィルムフォーマットについては、撮影カメラ・映写機の他に、交換ランプ、「PATHÉ FILMS VERGES」と記された小缶が残っている。16mm フィルムフォーマットについては、撮影カメラ「MAGAZINÉ CINE-KODAK」と 16mm フィルムマガジン数本^{vii}、映写機「KODASCOPE MODEL C」とそのマニュアルなどが一揃い残っている。35mm フィルムフォーマットについては、木製の撮影カメラと映写機が残っているが、名称や型番などは不明であり、撮影レンズ横に刻まれる情報、映写機銘板に記される輸入代理店「ゲルトネル兄弟商会」の情報をもとにして、機材自体の調査を進めることが必要である。

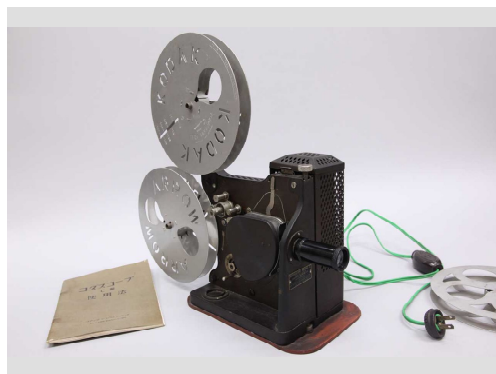


図 9：コダスコープ（16mm 映写機）



図 10：35mm フィルム撮影カメラ

4. 山本博士による「学術」映像利用について

山本博士の学術活動における映像利用について見てみる。1932 年の『天界』130 号、「天界新知識」中に「活動写真応用研究の新天文台」という記事があり、「冗談ではなく本気で」天体の活動写真撮影を行う米国マクマス・ホルバート天文台の観測活動を驚きと共に紹介

している^{viii}。当時は国際的に見ても、映像（活動写真）はまだ天文学研究において新奇な取り組みとして認識されていたようである。

1936年6月の日食を前にして、『天界』181号、5月号では、東亜天文協会会員の垂井増太郎氏による日食観測計画案として、専門家の日食観測の活動状況を16mmフィルムに収めたい、との記事がある^{ix}。6月の182号「日食特集号」では、山本博士による花山天文台日食観測隊計画の中で、第一観測隊第三班におけるコロナの眼視観測及び活動映写（飛行機による撮影）の計画が記されている。また、同号には日食観測における活動写真の応用について詳述した東京天文台石井重雄氏の論文を掲載している。さらに同号には早くも、7月に「日食大講演会・映写会」を開催予定という告知を見ることができる。実際、『天界』185号の花山だよりを見ると、1936年7月25日に東亜天文協会例会において遠軽での日食観測状況が16mmフィルムで上映され、また8月4日にはオムスクでの観測活動の様子が9.5mmで、8月8日には大阪支部例会で上記16mmがあいついで映写されたようである。さらに12月の東亜天文協会総会では、楽友会館を会場にして劇場公開映画『黒い太陽』その他国内の日食関係の映像を収集し、上映を企画したようである^x。また、観測終了後の『天界』に連載される各地の観測後記を見ると、第二観測隊（北海道中頓別村）、第四観測隊（満州国呼瑪）において何らかの形で16mm撮影機を用いたようである。

こうして見てみると1936年の日食観測は、山本博士をはじめとする天文学者および東亜天文協会による教育普及面における映像（活動写真）利用のメルクマールと考えてよさそうである。また、研究面における映像利用についても、その可能性を急ぎ試行している時期だと考えられる。

翌1937年6月には、ペルーでの日食観測が実施される。この観測にあたって山本博士は研究への映像応用を強く意識し、実践している。同年初め191号(3月号)の「今年6月9日の皆既日食」という観測当初計画において、観測のルーティンワークのひとつとして「(2) コロナの形状、光度、スペクトルの撮影—これは一括して赤道儀上に載せ、活動写真装置を應用した特殊工案をする」と述べ、前年の観測活動を記録する映像とは一線を画した映像利用計画を唱えている。

このペルー日食観測行については、『天界』に「南米日食観測行」および「米州行日誌」として連載されており、活動写真に関する言及も各部にみられる^{xi}。山本博士は、活動写真機械に新設計にもとづく工作を施し、6月8日ワンチャコに設置した観測所において活動写真による日食観測撮影に成功している^{xii}。その第一報は、すぐ日本に届けられ「写真13枚、活動写真50米撮影セリ」と花山急報に報じられている^{xiii}。この時に撮影されたフィルムが、2章で述べたペルー日食に関する35mmフィルム4巻に相当すると考えて間違いのないだろう。観測記録内容については、各フィルムの内容をデジタル化等によって確認する必要があるが、主要な観測プログラムとして列挙されている「接触時間測定」「第2接触に於けるフラッシュ・スペクトラム」「皆既中の明るさ測定」「コロナ・スペクトラム」「コロナ外観写真」^{xiv}に関するものと推定できる。

このように、ペルー日食での35mm活動写真記録は、山本博士の研究面における映像利

用の嚆矢であり、また相当に注力して実施したことがうかがえるが、活動写真記録に対する分析は、短い報告を除いてまとまったものがなく^{xv}、学術資料としての意義は山本天文台資料の整理と共に明らかにされていくことが期待される。

これら山本天文台に残された映像資料群は、日本の天文学における映像による教育普及・観測研究の先駆的なとりくみとして、また学術映像の歴史に位置づけられる貴重な資料群として、恒久的な保全と教育研究資源としての活用が望まれる。

i フィルムを切つてつなぐ編集作業を指す。後段、箱4のフィルムカット紙やすりなど。

ii 箱にそくして資料内容を記しているが、箱1~3は搬出に際して収納したものであり、オリジナルの収納状態を示すものではない。但し、それぞれの収納場所をある程度復元出来るかたまりになっている。

iii 35mmフィルムには「No.1 1937 PERU」と記載あり。9.5mmフィルム冒頭には日の丸と山本一清博士が視認できる。山本天文台資料内から見つかった、観測研究者からの寄せ書きのある日の丸が、1936年の日食観測を記念するものであることから、この9.5mmフィルムも1936年の日食関連のフィルムだと考えられる。写真投影用35mmフィルムには、1コマ目に「昭和23年5月9日(1948年) 礼文島ビーズ日食 編輯 京都大学助教授 藤波重次」などの記載あり。

iv 仏パテ社製「Othello ou le More de Venise 56」「Le Barbier de Séville 52」、国内の「正ちゃんの冒険4」「空中ページエント 64」など。

v 「Un procédé d'art en photographie 325 [手書き赤文字]シャシン術」「Le Moroir Magique 213 [手書き赤文字]カガミ術」など。

vi 川崎技師は、山本博士の義理の弟にあたり、親交が深かったようである。後の水沢緯度観測所第2代所長。(『天文月報』、1959年4月、池田徹郎「故山本一清博士と水沢緯度観測所」)

vii フィルムマガジンは暗室からも見つかっており、現像等の手作業の可能性もうかがえる。

viii 『天界』、130号、52「天界新知識」。なお、1936年のペルー日食観測行の帰路、山本博士は同天文台に立ち寄り、見学を行っている。(『天界』、206号、「米州行日誌」257。)

ix 垂井増太郎氏は東亜天文協会副会長であり、京都本能校長、京都府科学研究会会長などを務め、科学教育に活躍された。また陸生貝類の収集家としても知られている。

x 『黒い太陽』についての言及は『天界』187号、総会予告の上映案内にある。また、この上映企画については「日食の1936年を意義づけるものとして…(中略)…日食関係の総収集上映を行ってほしいとの希望があり」実施されたようである(『天界』、189号、支部通信)。なお、同会は「老若男女300名打ちまぜた会合」となり、盛会だったようである(『天界』190号、花山だより)。

xi 日食観測に関しての活動写真への言及とは別に、往路船内での娯楽としての活動写真上映や旅行記録としての活動写真撮影などについてふれている。

xii 『天界』200号、「米州行日誌」58-59。工作内容についての具体的記述はないが、山本天文台資料の紙焼きアルバムに、本活動写真撮影機の観測時の鮮明な写真が載っていることを天文台アーカイブ関係者から指摘いただいた。この写真に写っている焦点距離の異なる3つのレンズの交換を可能にするターレットが、山本博士による工夫のひとつと考えられる。

xiii [花山急報第254号]、『天界』、195号、340。その他の報告では12枚の写真とある。

xiv 『天界』197号、「南米日食観測行」418-419。

xv Nature, Vol.149, p.501: Observations of the solar eclipse of June 8, 1937. に観測経緯や接触時間等がレポートされている。観測行の映像記録である16mmフィルムについては、9月17日の東亜天文協会研究会で、山本博士自ら弁士となり解説上映されたとの記事が残る。『天界』、199号、「花山だより」13。

山本天文台の気象測器

武田榮夫

いまから 50 年ほど前、中学生のときに東亜天文学会に入会し、高校時代にかけて何度か「田上天文台」に足を運んでい。「田上」と書いて「たなかみ」と読む。いまでは、住居表示からこの地名は消えたが、1950 年代のそのころは「栗太郡上田上村（くりた郡かみたなかみ村）」と呼ばれていた。多感で夢多き時代の自分にとっては、この「田上天文台」は「わが青春の心のふるさと」であった。のちほど、「山本天文台」と改称されたが、これには多少の違和感を抱いたものである。山本一清博士が若き日に留学されたヤーキス天文台のほか、マクドナルド天文台、ローウェル天文台のように、多額の財産を寄贈した富豪や観測家などの個人名を冠した観測施設がアメリカでは珍しくなかった。多分、このような研究風土を体験されたことが、「山本天文台」と改称されたことに繋がったのではないかと思われる。やがて、その影響も加わって、自宅や所有地に持つ観測施設に個人の名を付したアマチュアの「天文台」が全国各地に生まれるきっかけとなった。

その田上天文台を初めて訪ねたときに、研究棟の上に風向風速計が設けられていて、風向計の「矢羽根」が時々向きを変え、「ピンポン球」のような風速計が盛んに回転していた。「天文台」だったので、その光景を意外に感じたのを憶えている。だが、そのうちに、その謎が解けた。庭には百葉箱が設置され、ここでは天体観測のために参考資料として、気象観測も行われていたのである。第一観測室と呼ばれていた山門の 1 階の部屋では、志願助手の方がラジオの気象通報を聞きながら、天気図を描いておられた。毎日天気図を作成し、それらを比較検討し、天気推移を追ってある程度の予想もなされていたであろう。それを天体観測ができるタイミングを知るひとつの目安とされていたと思われる。



気象庁型指示風向計



四杯型ロビンソン風速計



ジョルダン式日照計



フォルタン型水銀気圧計

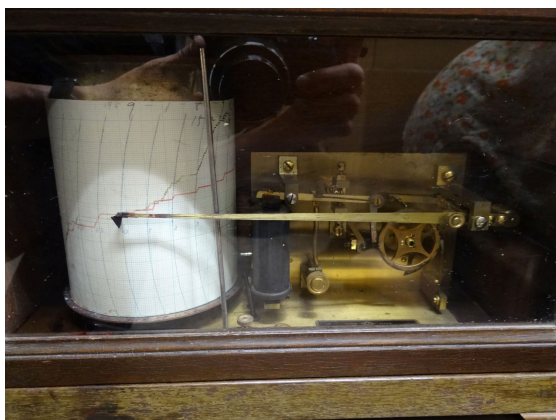


気圧・温度計



湿度・温度計

現地予備調査では、観測棟から当時に用いられた気象庁型指示風向計、四杯型ロビンソン風速計、ジョルダン式日照計、フォルタン型水銀気圧計、気圧・温度計、湿度・温度計などが、さらに京大の研究棟に収められたのちにも週巻きの自記雨量計、自記気圧計も確認された。これらのことから当時、いくつかの気象要素について連続して観測がなされていたことが察せられる。こうした天文台での気象観測をどのように解釈するのか、これにも興味深いものがある。前述のラジオ天気図の作成と合わせて、現地で気象観測から得られるデータも当日や翌日、その翌日の天体観測に生かされたと思われる。日々の天気図を追っていけば、高気圧や低気圧、前線などの気圧系の動きが検討づけられるし、自記記録紙に記されていく気圧の変化傾向を注意深く見守れば、多少の日変化を除けば、天気は下り坂に向かっているのか、回復に向かっているのかは察せられる。いまの段階では保存されていた気象測器の概要について考察を試みたが、観測されていた自記記録紙や観測野帳が今後見つけられかもしれない。



自記雨量計



自記気圧計

ときの流れで気象の測器も電子化されて久しいが、山本天文台の測器は当時を物語る貴重な文化遺産であり、山本博士の観測精神を示す遺品でもある。(気象予報士)

山本天文台に保存されていた望遠鏡の模型

大西 道一

山本一清博士は山本天文台の観測室の下に博物館のように天文学に関する実物・模型などの資料を収集保存されていた。いろんな分野があるがその一つとして望遠鏡の模型がある。木製の望遠鏡模型は以下のものがある。模型には付箋を付け下記のように記入されていた。

1. キルソン山天文台、六十吋反射鏡 模型
2. キ”クトリヤ天文台、七十二吋反射鏡 模型
3. キルソン山天文台、百吋反射鏡 模型
4. レプソルド式子午環 模型
5. ワンシャフ式天頂儀 模型
6. 子午儀 模型

これらの模型は材木を加工し一部金属を使用しているが、白木の儘で塗装をしていない。今後縮尺などの調査が望まれる。

東亜天文学会の広島総会(1956年5月26～27日)の26日の表彰式で長谷川一郎氏、本田実氏及び三谷哲康氏に表彰記念品として望遠鏡の模型を贈られている。この模型はヴィクトリア72インチ反射鏡であるが上記の模型よりより細部に手を加えた模型で木製の本体に銀色の塗装をしたものである。

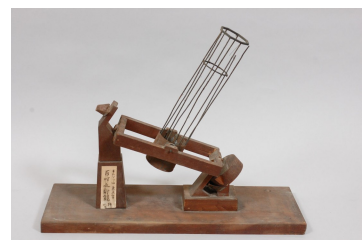
なお、翌27日は山本一清会長の第67回誕生祝賀会として午餐会があり寄せ書きが贈呈された。この寄せ書きは今回の資料倉庫に現存している。



キルソン山天文台六十吋反射鏡



キ”クトリヤ天文台七十二吋反射鏡



キルソン山天文台百吋反射鏡



レプソルド式子午環



ワンシャフ式天頂儀



子午儀

178 1956年7月 天界375 東亜天文学会の広島総会の報告 177

東亜天文学会の広島総会の報告

予告の如く、去る5月26~27日、広島市の視野野道館でO. A. A総会を開いた。まづ26日14時、本会理事長が座長席に就き、山本会長の開会挨拶あり、次いで1955-56年度の事務(世務と会計)報告と研究業績に関する報告あり。それから、表彰式に移り、長谷川一郎氏の「ベラン彗星に関する発見研究業績について」山本会長の演説と記念品の贈呈あり。尚この機会に、昨年名古屋の総会で表彰された本田英、三谷哲博両氏へも記念品が贈られた。

次に、役員の変更に移り、下記の如く決定した。

会長 山本一清氏、 副会長 宮本正太郎氏と宮森作造氏、
 理事 木田成徳氏(長)、小畑孝二郎氏、津田雄之氏、佐伯恒夫氏、村上忠敬氏、
 村山定男氏、高城次夫氏、福井実信氏、金子功氏、

それから山本博士の講演「太陽系の経緯について」があり、更に少休後、小畑副部長が座長席につき、下記の研究発表があった。

1. 火星に発生した変化について……………佐伯恒夫
 新しい模様はO. A. Aの火星観測ではスライファ以前に発見していた。新しい気流の帯が出来て、そこに植物が生じているのではなからうかと考えられる。
2. 火星に関する予報……………大西道一
 火星の観測にあたってはグラフを賣っておくと便利。火星の高度、中央経緯度が目によってどう変化するかをグラフで示す。工業グラフを使用して精しく書けば精度も上がる等である。
3. 木星大赤班の経緯変化について……………佐藤健
 大赤班は南緯帯の速度の変化の影響を受けているらしい。大赤班経緯度の減少率が大きい時、南赤班帯の速度は速。赤道の傾斜から見ると、近いうち南北赤班帯速度は逆転するのではあるまいか?
4. 白鳥座流星群について……………小畑孝二郎
 平均7年の周期で顕著に出現している。過去の資料の整理、軌道計算よりこの流星群は群星(傾斜が比較的大)系と考えるのが適当。輻射点が分散しているのは、昇交点付近で木星軌道に近い為、その傾斜による。
5. 流星の光度函数……………河野健三
 1950~1955年の自己観測した950個の流星データを整理して $x=2.4$ の値を得た。
6. 流星の古記録について……………長谷川一郎
7. 太陽黒点の経緯曲線について……………村上忠敬
 これまでのものから一つのノルマル・カ12を考えてみる。
 U. T. 比と Maximum Relative Number の関係がグラフに表すとウィーン(ウィーン)の輻射の規則に似るグラフになる。
8. 太陽黒点の理想曲線について……………荒木安司

更に28日は午前中 有志者の宮島観光の儀もあり、午後4時より中宿新聞社講堂で公開講演会が次ぎの如く開かれた。

山本一清氏、 “太陽と太陽系”
 佐伯恒夫氏、 “火星の探査”

尚、この機会に広島女学院(26日山本氏)、V's men's Club(26日山本氏)、広島女子短大(28日山本氏)、北浜小学校(28日木田氏)、大竹高校(28日山本小畑両氏)、大野町(28日佐伯氏、長谷川氏)、三次市(29日山本小畑両氏)の各所講演会が開かれ、又天体観望会も催された。

今回の新企画は広島県及び広島市の教育委員会や、広島天文愛好会や、中宿新聞社の協力が得られ、又、広島大学の竹山晴夫、村上忠敬両教授の懇切な提問が得られたのは感謝であった。(N)

編集室より 本号は臨時に34頁の特号です。次号にも太陽、流星、火曜等々の原稿を希望してゐます。各支部からの報告も期待します。(L)

東亜天文学会広島総会の様子を伝える『天界』の記事

『天文歌』考

富田良雄

山本天文台の第一研究室には漆塗り臙脂色の瀟洒な書棚があり、中には天文・暦法、和算関係の漢籍・和本が順序よく整理されて並んでいた。山本一清先生が大切にしておられた書籍ここにあり、という風格が感じられ山本章氏におねがいで書棚ごとそっくりそのままいただいてきた。背の面をながめているうちにふと手にした黄表紙の和綴りの小冊子に見とれてしまった。「天文歌」と赤い題箋が貼ってある。気難しそうな背を見せて居並ぶ漢籍・和本の中で、これだけがなにやら穏やかな顔つきをしていたからである。調べてみると、明治以降の天文学の教育普及に果たしたこの本の役割が見えてきた。

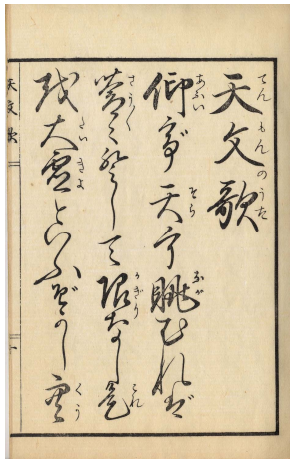


『天文歌』の表紙



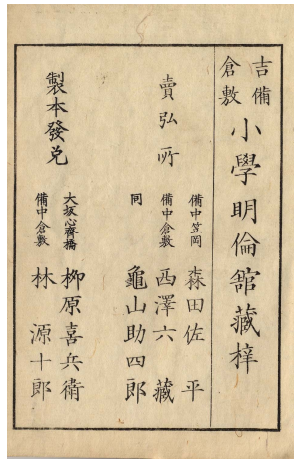
口絵（田中忠治刻）

これは明治七年（1874）二月に岡山の石阪秋朗が執筆し、倉敷の明倫小学館が刊行した教科書である。それも当時の天文学の知識を歌にして、生徒に唱和させ覚えさせるというユニークな発想の教科書である。最近はやった歌う生物学の教科書の元祖といえるだろう。サイズは 22.2cm×15cm で現在の A5 判に近い。扉には「仰而観象」と揮毫あざやかである。これは暦書の「観象授時」にちなんだ語であろうか。口絵は見開きの色刷り版画で倉敷かどこかの港で気球を見上げる人々の光景が描かれている。本文は十二丁（24 ページ）からなり、木版摺りの字は大きく 1 ページあたり 10 字×4 行であるから、全文でも千字に満たない。かな混じり文で漢字にはすべてルビがふってある。唱和して覚えるのに適当な長さの七五調の名文である。明治 5 年、時の政府が小学令を布告し全国に小学校創設をうながした直後の時期に刊行されている。ちなみに全国の大学図書館の蔵書を検索するとこの冊子は東北大学と筑波大学の図書館にわずか 2 冊所蔵されているのみの貴重書である。明治 6 年に太陽暦への改暦があり、『改暦弁』（福沢諭吉著）などの解説書が数多く出版されて一般人も天文・暦学に関心をもった時期であった。



本文の1ページ目

という名調子である。



奥付き

この冊子の奥付には「吉備倉敷小学明倫館蔵梓、 賣弘所 備中笠岡 森田佐平、備中倉敷 西澤六蔵、同 龜山助四郎、 製本発兌 大阪心齋橋 柳原喜兵衛、備中倉敷 林源十郎」とある。倉敷は江戸時代通商の港として栄え、倉敷、笠岡ともに幕府代官所があった豊かな地域である。天保五年（1834）倉敷代官古橋新左衛門が代官所北側に倉敷教諭所を建て明倫館と名づけた。犬養毅らが学んでいる。慶応二年四月に長州奇兵隊の襲撃を受け倉敷代官所は焼けた。明治維新直後、備中の意気高き人たちが資金をだしあって小学校を設立し、その教科書を自力で出版したと推測されるのである。森田佐平は書籍商を営み笠岡村の副戸長をしていた。明治六年に「小田県新聞」を発行している。佐平の息子思軒は『十五少年漂流記』、『レ・ミゼラブル』の翻訳家として知られる。なお明治六年から七年にかけて小田県管内で石坂秋朗著『天文歌』、佐伯義門著『山蚕養法』をはじめとして11点の教科書・実用書が出版されている。

備中から備後にかけての瀬戸内地域は天候がよく、天文愛好家の多い地域である。これには大正年間に設立された倉敷市民天文台の果たした役割が大きい。大原美術館を設立した大原孫三郎氏を中心とした市民の寄付により設立されたこの天文台は世に言う市民天文台の第一号であり、今も健在である。この天文台の設立に協力し、各地で天文講演会をおこなったのが山本一清先生であった。そうした活動が多くの天文愛好家を育て、またその中から宮本正太郎先生（尾道出身）のような天文学者が輩出した。今手元にあるこの教科書をめくっていると、自然と声にだして読んでみたくなるのも不思議である。岡山に天文学の愛好者が多いのは、明治初頭の学校教育にかけた地元の先人たちの努力があったからこそかもしれない。

変体がな本文には苦労したが、地元笠岡の山本稔先生、伊藤親之先生のご教示によりほぼ楷書体に置き換えることができた。また両先生からは岡山の教育関係資料のコピーをいただき倉敷明倫館の沿革が理解でき感謝する次第である。付録に天文歌の全文をかかげておく、縦棒にて改ページを示す。できれば復刻してみたいと考えている。

本文の1ページ目を引用すれば

天文歌 /

仰で天を眺むれば / 蒼々とし

て限なし是 / を大虚といふぞか

し空・・・」

天文歌

仰あふいで天そらを眺ながむれば

蒼々そうそうとして限かぎりなし是これ

を大虚たいきよといふぞかし空くう

活くわつ至虚しきよにみゆれども

清澄せいぢやうき稀微びの遊氣ゆうき有あり

遊氣ゆうきの外そとに太陽たいやうは

常つねに懸かりていつまでも

處ところ移うつさず其体そのたいは光明くわうめい

至大しだいの火球くわきうなり其その

全徑ぜんけいは英国イギリスの八十

二万と二千百四十と

八里はちりありと聞きく水星すいせい

金星きんせい我地球わがちきう火星わせい木もく

星土星等別せいとせいなどべつに一二

の星ほしありて外圍ぐわいゐを

互たがいに巡めぐるなり此衆このしう

星せいの総名そうみやうを大遊星たいゆうせい

といふぞかし猶なほこの

外ほかに数々かずかずの小遊星せうゆうせいも

ありとしれ地球ちきうも同おなじ

星ほしなれば大遊星たいゆうせいの

ひとつなり近ちかく望のぞめ

ばその光ひかり分明ぶんめいなるは

大陰たいいんぞさて大陰たいいんの

其体そのたいは小遊星せうゆうせいの一いつに

して其全徑そのぜんけいは英

国りすの二千と百と七十

五里地球ちきうと共に太陽たいやう

の外圍ぐわいゐを廻めぐり太陽たいやうの

光ひかりをうけておのず

から明闇めいあん昼夜ちゆうやの分わかち

あり地球ちきうは常つねに自じ

転てんして独樂子こまの廻まはる

に異ことならず自轉じてん

の榛しんの兩端りやうたんを南北なんぼく

極きよくというぞかし地球ちきうの

面めんが大陽たいやうに向うた時とき

が昼ひるなるぞ背そむいたとき

を夜よるとしれ其一そのいつてん転てんが

一日いちにちぞ三百六十五てん転てん

して天てんの度数どすうを一いつ

周しうし元度げんどに復かへるが

一年いちねんぞ天度てんどは三百

六十度どにし西ひがしと東たては経たて

なるぞ北きたと南みなみを緯ぬきと

知しれ中なかは赤道せきだう南北なんほく

を南緯なんいほくい北緯なつと名

くるぞ冬ふゆは斜ななめに日ひ

を受うけて夏なつは直ただちに

日ひを受うける春しゆん秋しう二季にき

は平へい分ぶんに日影ひかげを受うける

それ故ゆえに四季しきの更かほりも

有ありとしれ地球ちきうの面めん

の全径ぜんけいは皇国みくにの法ほう

の里数りすうにて壹萬まん

零々れいれい八十里じつげつちきう日月地球

の三たい体おなが同けいじ経緯けいゐ

の度どにあたり出であう会かい

た時ときが蝕しよくなるぞ小遊せうゆう

星せいは金星せいと我わが地球ちきう

とに一個ひとつづつ土星とせいに

五個もくせい木星よつに四個よつを

合あはせて十一個こたいゆう大遊ゆう

星せいに附属ふぞくして明暗めいあん

盈虚えいきよは大陰たいいんの地ち

球きうに於おけるとおなじ事こと

大小星たいせうせいの其外そのほかにまた

恒星こうせいの一種いっしゆ有遠ありとほく

望のぞめば一点いってんの螢ほたるのか

げに異ことならず是これは一ひと

個つの火球くわきうにてわが大たい

陽と同じ事俗に所

謂天の川衆恒星の

群集して河象を成

すに外ならず至遠の

天の外なれば其理

は知り難しまた棼

星の一種あり光芒

ながく尾を曳て甚

怪しき星なれど

また遊星の外ならず

其行道の長ければ

多年の後に壹度

づゝわが天頂を過る

なり彗星天に出る

時天災地妖の徴とい

ふ無稽の俗説笑

ふべし上に挙たる

略説は唯天文の一

般を童のために筆

記して窮理の門

の開き初其堂室に

入らむには他の博物

の書を見るべし

（「―」は改ページをしめします。なお本文の解説にあたっては岡山の山本稔先生と伊藤親之先生のご教示を得ましたこと、厚く感謝いたします。）

あとがき

歴史上の人物の評伝は、残された同時代の一次資料と後世の二次資料・伝説から構築される。時をはるかにさかのぼる古代の人物となると、一次資料はほとんど残っていないのが一般的であろう。卑弥呼しかり、聖徳太子しかりである。かろうじて伝えられた資料も時の権力による取捨選択を経て著しく改変させられていることがある。近代以降になればその事情は一変するかというと、意外や一次資料は関係者の善意により整理され、都合のよいものだけが残されるのが普通であって、その人物の人生の真実を語るものすべてが残されることは少ない。一次資料が豊富に残され数次にわたり全集が出版されてきた宮沢賢治でさえも、その短い人生の要のできごとについて隠されている事実があるという。作品の詩文そのものからの解明が進みつつある。このたび京都大学に寄贈された膨大な山本資料は、山本先生の人生そのもの、その頭脳の全活動を反映するものである。また直接先生の薫陶を受けられた人も健在であり、今回そうした話も語っていただき一部を集録に掲載できた。

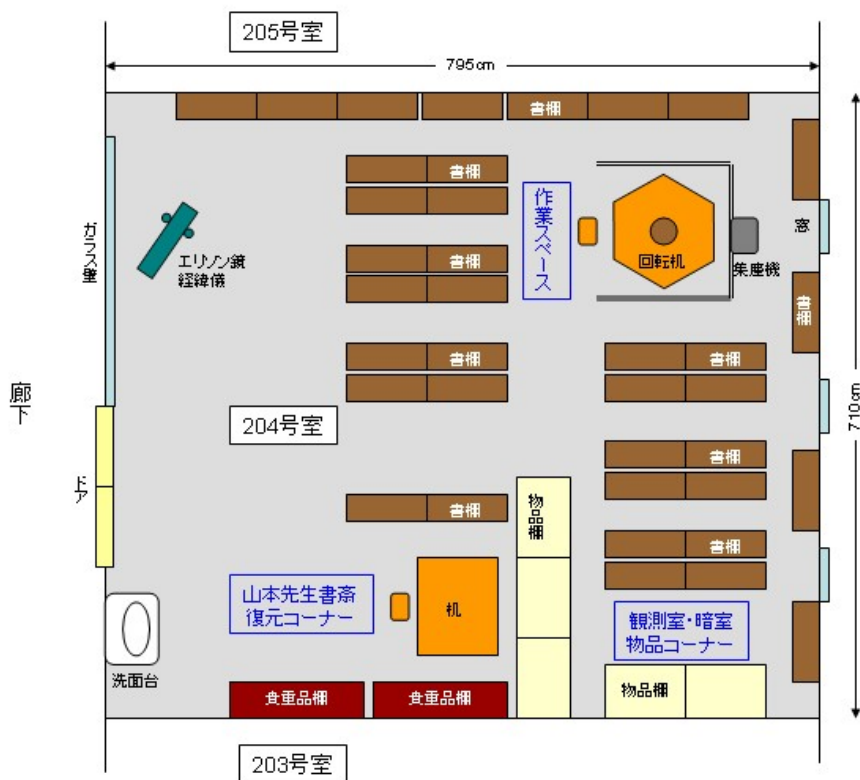
日本天文学会の定款に特別会員、通常会員、賛助会員の規定がある。特別会員は研究者対象であり、通常会員は天文愛好家が対象となっている。かつては会員数のうえでは圧倒的に通常会員のほうが多数を占めていた。公式の学会においてこうした一般人の正式加入を認めている学会はめずらしいのではないだろうか。その定款の成立背景には、日本の天文愛好家を育てた山本先生の影響が大きいと考えられる。

さて、高い目線からの表向き評価を別にして、山本資料はそのひとつひとつが実に興味深いのである。保管室にはいと向いの机の横においてある三球儀が目に入る。これは事前調査のおりには輸入品だと判断していたのだが、実は明治時代に山口県のまったくの素人の方が、年月をかけて製作し持ち込まれたものであることが判ってきた。数多くのギヤを使用して太陽の周りの地球と月の運行を表現している。製作者はなんのためにこの三球儀を作ろうとしたのだろうか。机の抽斗のひとつに府県毎に分類整理されてびっしりと詰め込まれた名刺、宛名カードがある。これは東亜天文学会の会員リストであり、かつ先生の交友関係を語る貴重な資料でもある。国内・海外の絵ハガキが和本を収納する俵匳蓋箱に整然と積まれている。また記録魔であった先生が生涯撮影された写真のネガ、写真アルバム、それを使った著作物と原稿がそっくりそのまま残っている。極めつけは兵庫県の旧家からあずかされたそのご先祖が文化年間に制作されたというたたみ6畳分くらいの大きさがある星図と関連資料。これは先生の書斎とされていた第一研究室の天井の吊り棚に「非常持ち出し」という札のついた風呂敷に包まれて保管されていた。地図マニアでもあったのだろう、戦前の京都、大阪、東京、朝鮮各地の一万分の一地形図が保存のよい状態で残されている。倉敷の大原美術館の収蔵美術品の特製大型本もある。山本天文台に設置されていた気象観測機器類、これについては武田榮夫氏に記事を執筆していただいた。また、世界各地の天文台の望遠鏡等の木製ミニチュア模型もある、これは大西道一氏に記事を執

筆していただいた。中国、朝鮮の天文図拓本については、宇宙物理学教室図書室所蔵の2本とあわせて、宮島氏とその研究グループの方々には調査していただいた。昭和18年ころの岡山長島愛生園ハンセン病療養所慰問と長島天文台建設活動など、ほかにも取り上げればきりがない。まだ資料本体である600箱をこえる書類・書籍のほうにはほとんど手がついていない段階でこの状況であるから、今後の調査が非常に興味深いものとなるのは必至である。

なお付け加えておくと、来春京大総合博物館にて開催予定の「京大日食展」に未整理の状態ではあるが先生が観測に携われたスマトラ日食、北海道日食、ペルー日食等の観測データや暦学関係の漢籍・和本を出展する予定である。日食展を見学される方々に京大にこんな興味深い資料が保管されているのかと認識を新たにしてもらえればと考えている。

調査はまだはじまったばかりである。現在、益川記念館にもう一室(204号)プロジェクト室が確保できたので、整理棚や環境の整備をすすめているところである。準備が整えば、多方面、多くの方々の協力を得ながら、まずは資料目録の製作からはじめ、最終的には「山本一清伝」の共同執筆をめざすことになるだろう。他には無い規模の資料をもとに、これまで評伝が書かれてこなかった先生の業績の総合的再評価を行えればと考えている。



北部総合教育研究棟2階新資料室(204)資料配置案

(追記) 山本章氏からの連絡では、山本天文台建物および本宅は10月上旬に取り壊されたとのことである。



文鎮代わりの香立

38×25×13mm、青銅製